慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿部秀助先生の学究的生涯
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.2 (1925. 2) ,p.306(154)- 316(164)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

脱すると共に、他方に於いては依然として技術的生産の三要素を主張するを得たのである。之を以て彼の資本理論に關する最も特色ある點と認むべく、又斯の如き見解は十分吾人の注目に値する所であると信ずる。（完）

阿部秀助先生の學究的生涯

高木壽一

大正十四年一月三日、午前十時二十分を以て阿部秀助教授は其聖い生涯を終られた。

先生は明治九年七月、九州福岡市須崎町土手町に出生せられ、長じて明治二十五年福岡高等小學校を卒業せられたる後、故郷を去つて山口に到り二十九年山口中學校、三十三年山口高等學校を卒業せらるるや、笈を負ふて東上し東京帝國大學文科大學史學科に入學せらる。此東都遊學の間脚氣に惱まされて一年の休學を餘儀なくされ明治三十六年七月同史學科を卒業せられた。先生は卒業以前の三十六年五月既に『内田博士の「日本近世史」を讀む』（史學雜誌）を發表せられた。續いて左の二篇の研究論文を公表された。

明治卅六年十一月　德川家康の商政と「メルカンチリズム」との關係を論じて彼が通商奬勵の動機に及ぶ（史學雜誌）

同　卅七年一月　伊達政宗海外派遣使の目的に對する吾人の疑問（史學雜誌）

文科大學史學科卒業後直ちに明治義會中學に奉職し歴史、地理を講ぜられ、翌三十八年には暫く讀賣新聞に入社せられた。恰も此頃は先生の苦闘時代であつたと後に自ら人に語られたことがある。三十八年四月よりは法政大學に講義をせらるることゝなつた。當時先生は法學士河上肇氏と學交あり、河上學士譯「新史觀」に寄せた序文の中に、先生の歴史觀の一班を示されて居る。明治三十八年七月三十日、召集令を受け直ちに小倉に急行し、八月戰地滿洲の野に出征された。軍務は後方輜重の任なれども幾度か前線に往復せられて辛苦を積まれた。三十九年二月歸還、直ちに以前の如く法政大學の講壇に立たれた。

然るに明治四十年、慶應義塾に於て地理學、歴史學を講ずべき人材を求むるや、先生は當時學交を訂することの密なりし福田德三教授の賞讃措かざる辭ありて、義塾に入り大學豫科に於て地理、歴史を講ぜられ又暫くは普通部に於ても地理を講ぜられたるやに傳へ聞く。

爾來今日に到るまで慶應義塾の教授として愈々益々其學蹟を積まれたのである。今先生の著作論文を左に列擧せん。

明治四十年十月　綜合經濟地理

明治四十一年　日本地理講義（上）

一　月　世界經濟上に於ける門戸開放主義（國民經濟雜誌）

二　月　本邦古代史（慶應義塾學報）

三　月　現代の史風（史學雜誌）

四　月　世界經濟上に於ける門戸開放主義（國民經濟雜誌）

八　月　海洋の研究（上）（慶應義塾學報）

九　月　古代史研究の方法に就きて（歴史地理）

十　月　海洋の研究（下）（慶應義塾學報）

明治四十二年

一　月　人文史上に於ける都市（歴史地理）

十七世紀に於ける日米の關係（上）（慶應義塾學報）

二　月　十七世紀に於ける日米の關係（下）（慶應義塾學報）

五　月　日本基督教史の研究（信長、秀吉、家康の基督教徒に對する態度）（三田學會雜誌）

八　月　新著紹介ドーソン男、蒙古史　田中萃一郎譯（三田學會雜誌）

九　月　上總介忠輝（一）（三田學會雜誌）

十　月　上總介忠輝（二）　（三田學會雜誌）
最近に於ける世界各地に於ける探檢（慶應義塾學報）
十一月　上總介忠輝（三）　（三田學會雜誌）
明治四十三年
二　月　上總介忠輝（四）　（三田學會雜誌）
中世に於ける資本的企業の史的發展（史學雜誌）
三　月　上總介忠輝（五）　（三田學會雜誌）
四　月　新著紹介幸田成友著大鹽平八郎（三田學會雜誌）
六　月　宗教改革時代と資本主義　（三田學會雜誌）
九　月　日本地理講義（下）

此年先生は慶應義塾より海外留學を命ぜられ西比利亞鐵道により露都を經て、同年秋獨逸伯林に入り、十月上旬には研究の便宜上、伯林大學に入學された。そして其入學式に當つてシュモット總長と堅き握手された時には一種の感慨に打たれたと云ふことである。其月は恰も伯林大學百年祭に相當し盛んなる炬火行列が催された。先生も喜んで獨逸の學生と共に此行に參加せられた。其後暫く先生は伯林大學のシュモーラー教授に就き、又伯林高等商業學校のゾムバルト教授の經濟史をも聽講し、研究主題とせられたる「企業の見地より觀たる中世史及び近世史」と二三の理論的方面に關係する研究材料蒐集のために伯林の王立圖書館、伯林大學附屬圖書館に通はれた。そして先生自らは、シュモーラー。ゾムバルト兩教授の學說に對して少なからざる疑問と史的反證を有するものであると云はれた。其年の秋十月二十五日の日附を以て伯林より祖國に其近況を報せられたる書信の末には斯く書いてある。

「…日本の如き新進の學術國に於て必要なるは戰場の功名者にあらずして寧ろ戰場の犧牲者に有之候。不肖、生が如きもの既に日露の戰役に於て死す可き身なり。餘命を今日に全ふするは之れ天の賜なり。余は此一事を回想する毎に、感慨の念胸に充つるを覺ゆ。希くは餘命のあらん限り、日本に於ける着實なる史風の犧牲者となり、後援者となつて研究に從事致度候。…遠く離れて祖國の現狀を回顧すれば、實際の政策に於て將に思想上の傾向に於て多く論ずべきもの有之候。只讀むべき書の多くして月日の經過し易きこと眞に人生の一大恨事に有之候」。

翌年、南獨逸地方並に伊太利の諸都市を歷遊せられ、英國アメリカを視察し明治四十五年七月歸朝された。後に先生は「滯歐二箇年、其間殊に深き印象を受けしはゾムバルト教授とす。其直截にして明快なる講義は……云々」と自ら述べて居られた。爾來、義塾の教壇に於て昨年に到るまで理財科、經濟學部に於ては近世經濟史、獨逸經濟學說、獨逸語、研究會。文學部に於ては西洋史、地理學、史學研究法を教授、指導せられた。先生の學生に對せらるや實に懇篤を極め如何なる勞をも惜まれない。されば一度先生の講義に參じ、指導に浴したる者は永く先生の德を思慕して已まないのである。年と共に先生の研究蘊蓄愈〻深く、時々其學殖の一端を發表されたのである。

大正元年
九　月　歐米諸國の大都市（上）　（法學志林）
十　月　原始民族に於ける交換の意義　（三田學會雜誌）
伯林より巴里へ　（人生と表現）
歐米諸國の大都市（中）　（法學志林）
十一月　歐米諸國の大都市（下）　（法學志林）
埠頭　（人生と表現）
大正二年
一　月　史學の根本問題・史學の客觀性と史料の心理的意義　（史學雜誌）
基督教と新生活　（人生と表現）
獨逸と「パルチクラリズムス」　（慶應義塾學報）
二　月　獨逸最近の經濟學　（國家學會雜誌）
七　月　近世資本主義と地代說——ゾムバルト教授の資本主義起源說に對する史的批判　（三田學會雜誌）
八　月　歐洲の樂觀的財政　（法學志林）

大正三年

一　月　中世企業史に關する研究　（三田學會雜誌）
企業家とは何ぞや　（慶應義塾學報）
四　月　民族の企業化（上）　（三田學會雜誌）
五　月　民族の企業化（下）　（三田學會雜誌）
新著批評紹介ツイッテ伯、國民經濟並に財政講義。
石原學士女工の現況　（三田學會雜誌）
六　月　資本主義の社會的研究
新著批評紹介アシュレー嬢、比公の社會政策。トレルチ流行に關する國民經濟的觀察　（三田學會雜誌）
八　月　歐洲の大戰役と列强の財力　（三田學會雜誌）
新著批評紹介シェンスターベルヒ、心理學と經濟生活　（三田學會雜誌）
同　日本經濟叢書一、二、三　（三田學會雜誌）
野中兼山　（慶應義塾學報）
十　月　獨逸の戰時經濟　（三田學會雜誌）
世界經濟學の要求と其意義　（日本社會學院年報）
十一月　獨逸對列强の抗爭　（時事叢書第十編）
十二月　戰時に於ける獨逸の食料問題　（國民經濟雜誌）

大正四年

一　月　獨逸と穀物關稅問題　（三田學會雜誌）
五　月　元寇の研究　（三田評論）
六　月　元寇の研究　（三田評論）

獨逸戰時財政の根底如何（上）　（三田學會雜誌）
獨逸戰時財政の根底如何（下）　（三田學會雜誌）
七　月　中世都市の典型としての「ローテンブルク」　（歷史地理）
八　月　現代史學とランプレヒト　（歷史地理）
十　月　古史の經濟史的研究

大正五年

一　月　戰後の經濟的革新（一）　（三田學會雜誌）
二　月　戰後の經濟的革新（二）　（三田學會雜誌）
三　月　戰後の經濟的革新（三）　（三田學會雜誌）
四　月　戰後の經濟的革新（四）　（三田學會雜誌）
最近に於ける奧國の財政　（三田學會雜誌）
五　月　都市の意義及成因　（歷史地理）
戰後の經濟的革新（五）　（三田學會雜誌）
十一月　經濟的活動革命論　（金星）
十二月　最近濠洲に於ける勞働問題　（日本經濟新誌）

大正六年

一　月　戰後の獨逸　（時事叢書第三十一編）
戰後獨乙の內地移民問題　（三田學會雜誌）
新著紹介、伊藤重次郎著交通論第一篇　（三田學會雜誌）
二　月　新著紹介フォンクリス著、支那經濟財政論　（三田學會雜誌）
三　月　戰後に於ける獨逸の教育　（大民）
戰後獨逸の經濟的關係　（日本經濟新誌）
四　月　支那と關稅（一）　（三田學會雜誌）
獨乙の學問至上主義　（大民）
五　月　支那と關稅（二）　（三田學會雜誌）
六　月　戰亂と墺の中心人物　（斯論）
支那と關稅（三）　（三田學會雜誌）
新著紹介 Chi Chu: The Tariff Problem in China　（三田學會雜誌）
政治的訓練としての總選擧　（大民）
七　月　スメール文化の研究　（史林）
學生の鎖夏法　（大民）
八　月　三十年戰爭の影響如何　（史學雜誌）
佛國人口の將來（上）　（三田學會雜誌）
新著批評紹介支那關稅引上反對意見書　（三田學會雜誌）
九　月　頻發せる同盟罷業　（大民）
日本勞働問題の女性的性質　（新日本）
十　月　三十年戰爭の影響如何　（史學雜誌）
佛國人口の將來（下）　（三田學會雜誌）
企業家論　（大民）
理解なき教育　（大民）
物價と浪費　（大民）
十一月　戰後の消費經濟　（國家學會雜誌）

我邦海港の史的研究
——博多と堺——　（三田學會雜誌）
十二月　三十年戰爭の影響如何　（史學雜誌）
戰後の國際的經濟戰　（經濟時論）

大正七年

一　月　倫敦時代の Karl Marx　（三田學會雜誌）
獨墺兩國の要求　（新時代）
三　月　ナショナリズムの意義及價値　（新日本）
四　月　四比利亞の經濟的意義（上）　（三田學會雜誌）
戰後に於ける獨乙教育の新傾向　（大民）
五　月　元寇（一）　（大民）
近世經濟史上に於ける企業家の地位（一）　（三田學會雜誌）
西比利亞の經濟的意義（中）　（三田學會雜誌）
新著紹介池田龍藏、無盡の實際と其學說　（三田學會雜誌）
六　月　近世經濟史上に於ける企業家の地位（二）　（三田學會雜誌）
西比利亞の經濟的意義（下）　（三田學會雜誌）
元寇（二）　（大民）
七　月　戰後の對外的企業を論ず　（金星）
都市とは何ぞや　（大民）
近世經濟史上に於ける企業家の地位（三）　（三田學會雜誌）

第十九卷　（三一二）　阿部秀助先生の學究的生涯

八　月　民族的國家の復活か――猶太人の勢力　（太陽）
　　消長及び處分問題
　　近世經濟史上に於ける企業家の地位（四）　（三田學會雜誌）
九　月　クロンウエルの植民政策　（歴史と地理）
十　月　德川時代の米騒動　（三田評論）
　　植民地としてのシベリア　（青年）
　　近世經濟史上に於ける企業家の地位（五）　（三田學會雜誌）
十一月　獨乙社會主義の二傾向　（三田學會雜誌）
十二月　カブール　（英傑傳叢書）
　　講和會議の根本的意義　（新時代）
　　歐米に於ける婦人勞働問題
　　（社會政策學會に於ける講演）

大正八年

一　月　オスチヤの歴史地理的研究　（歴史地理）
　　藝術と經濟――文藝復興期の經濟史的研究（一）　（三田學會雜誌）
　　戰後の日本に對する感想　（大民）
二　月　藝術と經濟（二）　（三田學會雜誌）
　　戰後の佛蘭西と勞働問題　（極東時報）
　　我國婦人勞働問題の經濟的意義　（大民）
　　人種的差別觀の意義　（黎明會講演）

三　月　藝術と經濟（三）　（三田學會雜誌）
四　月　獨墺の合併實現せられん（上）　（大民）
　　藝術と經濟（四）　（三田學會雜誌）
五　月　藝術と經濟（五）　（三田學會雜誌）
　　獨墺の合併實現せられん（中）　（大民）
六　月　大戰と民族運動の消長　（太陽）
　　繼母根性を去れ（朝鮮問題）　（黎明會講演）
七　月　獨墺の合併實現せられん（下）　（大民）
十　月　理解せよ　（改造）
　　藝術と經濟（六）　（三田學會雜誌）
十一月　新著批評紹介福田博士黎明錄　（三田學會雜誌）
十二月　株式會社起源考　（三田學會雜誌）

大正九年

一　月　既婚婦人勞働問題　（三田學會雜誌）
　　新著批評紹介リース改訂世界史　（三田學會雜誌）
二　月　普選と政治思想　（大民）
三　月　土耳其處分問題　（大民）
　　新著批評紹介、東亞政究會々報第二號　（三田學會雜誌）
五　月　講壇社會主義　（三田學會雜誌）
六　月　同盟罷業と民衆　（太陽）
　　講壇社會主義　（三田學會雜誌）
　　新著紹介、松本芳夫著神代史研究（三田學會雜誌）

七　月　勞働不安より國家不安の獨逸　（太陽增刊號）
　　青年の社會的自覺　（新青年）
八　月　如何にして議會を改造す可きか　（大民）
九　月　思想と國民性　（大民）
十　月　フイヒテの經濟觀　（三田學會雜誌）
　　Edward Friedmann: Der mittelalterliche Waldadel von Florenz in seine geographischen Ausdehung mit 2 Tafeln.
　　史上に於ける陸主々義と海主々義　（大民）
十一月　婦人勞働問題　（社會政策時報）
　　フイヒテの經濟觀　（三田學會雜誌）
　　新著紹介、小泉信三著經濟學説と社會思想　（三田學會雜誌）
十二月　宗教改革時代の文化的價値　（三田評論）
　　フォルアーベルグ問題　（三田學會雜誌）
　　近世英國外交史論（一）　（大民）

大正十年

一　月　近世英國外交史論（二）　（大民）
二　月　近世英國外交史論（三）　（大民）
三　月　過激派と帝國主義　（外交時報）
　　普魯西主義と社會主義解説　（日本讀書協會々報）
　　近世文化生活の意義　（大民）
四　月　石城志考　（三田學會雜誌）

第十九卷　（三一三）　阿部秀助先生の學究的生涯

五　月　中世の文化生活に就きて　（大民）
　　大陸封鎖令　（三田學會雜誌）
　　英國炭坑夫の同盟罷業を論ず　（太陽）
六　月　大陸封鎖令　（三田學會雜誌）
七　月　右傾か左傾か　（太陽）
八　月　講壇社會主義　（慶應義塾經濟思想講演會講演）
十　月　新著紹介 Eucken: Socialismus　（三田學會雜誌）
十一月　ハンザ對英國（上）　（三田學會雜誌）
十二月　ハンザ對英國（下）　（三田學會雜誌）
　　新著紹介加田哲二著、經濟價値論　（三田學會雜誌）

大正十一年

二　月　諏訪時代に於ける上總介忠輝（上）　（史學）
　　近世資本主義起源考（一）　（三田學會雜誌）
三　月　近世資本主義起源考（二）　（三田學會雜誌）
四　月　產業の社會化に就て　（大民）
　　近世資本主義起源考（三）　（三田學會雜誌）
五　月　諏訪時代に於ける上總介忠輝（中）　（史學）
　　理想と現實　（大民）
　　近世資本主義起源考（四）　（三田學會雜誌）
六　月　近世資本主義起源考（五）　（三田學會雜誌）
七　月　近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）
八　月　近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）
九　月　近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）

十　月　マルキシズム　（大民）
近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）
十一月　近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）
十二月　近世資本主義起源考續論　（三田學會雜誌）
朝鮮文化の將來　（三田評論）

大正十二年
一　月　近世資本主義と殖民經濟　（三田學會雜誌）
農村問題の社會的意義　（東亞の光）
二　月　近世資本主義と殖民經濟　（三田學會雜誌）
自覺せる青年の進むべき目標　（實業之日本）
三　月　近世資本主義と殖民經濟　（三田學會雜誌）
四　月　近世資本主義と殖民經濟　（三田學會雜誌）
五　月　最近に於ける佛蘭西對獨逸ランケ「歐洲近世史」譯　（大民）
七　月　（歷史叢書）
十一月　歸朝時代に於ける上總介忠輝（下）　（史學）
書評西村眞次著「國民の日本史「大和時代」」（史學）

大正十三年
一　月　吾人の求むる所（貴族院改造問題）（大阪朝日新聞）
三　月　石城志考　（東洋哲學）
四　月　日本農家とスウィスの小家　（住宅）
十二月　我國に於ける新宗教の使命　（人と人）
譯著「社會主義に對する諸觀察」　（中外文化協會叢書）

以上、列擧せる諸著作論文の外、大正十年以來、慶應義塾經濟學部の諸教授と共に時事新報、經濟學講義錄に於て近世商業史、獨逸經濟學說の二科目を擔當せられた。殊に其後者の一部は昨秋病床に在り、疲勞苦痛を推して執筆せられたる謂はゞ最後の論文である。其他先年、實業之日本社、帝國實業講習會講義錄に經濟地理を講述せられたことがある。近年先生は從來積年の研究殊に近世資本主義史の研究を整理大成せらるる意を懷かれて、着々其歩を進めて居られたと承はる。然るに其未だ成らざるに不幸にして逝かれたること、學問そのものためにも一大恨事と云はねばならない。

先生が慶應義塾に講ぜらるること前後約二十年に近きも其間時に東洋大學、並に國士館に於ても講義された。殊に國士館には大正九年の頃とか、懇請拒み難く暫く學長の任に就かれたと云ふことである。

斯く學問の研究、青年學徒の敎導を以て其天職となして學窓の生活を樂まれたる一面に、又世論の啓發に努むることを以て生涯の一使命ともされて居た。先生の一度壇上に立たるるや、忽ちにして、全身あらん限りの熱血の、其の悉くを盡したる慷慨熱烈の辯、言々句々眞の情と理とを以て聽者の心に迫るものがあつた。大正九年辯論部部長に推戴せられ、先生が由緒深き三田演說館に於て雄辯を振はれたこと前後數十回に上つたであらう。每夏同部の夏季講演には若き學生を率ひて地方各地に講演せられて寧日もなかつた。又一面に於ては旅行は先生の大なる趣味であつた。異鄕の風物、山水、人情は先生の鋭い觀察の對象であつた。或夏の旅行地より頂いた書信の一節には「……旅に起き旅に暮らし候も亦、人生に於ける一興と存候」と書かれたのを記憶して居る。

大正十一年秋の頃より先生には稍〻健康勝れずとの事であつた。そして十二年四月よりは講義を減ぜられて專ら靜養せられたれど、疲勞次第に甚しく、見る眼も痛々しき樣に思はれて來た。翌年五月一日最後の登塾せられたる後は全く休講せらるるの已むなきに到つた。其後病症は一進一退し、其報のある都度人々は喜憂を新にした。先生の先輩、友人の方々は凡ゆる途を以て慰藉の友情を示された。經濟學部諸敎授の「經濟學說研究」が先生に獻呈せられた秋の頃は可成元氣を回復せられて、病床を訪ねる人々と快談せられた。先生は必ず今一度健康を回復して再び學生の敎導學問の研究に從事せねばならないと信じて居られた。人々も是非とも斯くあることを願つて居た。

されど、冬來つて北風の續く頃感冒に襲はれ

て後は、衰弱殊に甚しく、今年に入りて三日、遂に先生自身の望みも又人々の願も空しくなつた。

顧みて先生の聖き生涯を追憶すれば、先生若くして伯林に在りし日の言葉――「日本の如き新進國に於て必要なるは戰場の功名者にあらずして寧ろ戰場の犧牲者に有之候……餘生のあらん限り日本に於ける着實なる史風の犧牲者となり、後援者となりて研究に從事致度存候」――は強く吾等の心を打つ。是こそ、學者、教育家としての先生の生涯を貫く一大信念であると私は確信する。蓋し先生ありし日の思出の一事一事を辿る毎に、愈〻其感を深ふせざるを得ないからである。

（阿部教授追悼會三田演說館に催されたる翌日一月廿三日稿）

附記、本文起草に當り故先生に私淑せらるること最も深き宮島貞亮教授の助力に俟つこと最も大なるものあり。深く感謝に堪えざる次第なり

先生の諸雜誌に發表せられたる論文は、本文に列擧したるもの以外に、多くあるべしと信ずれども、多く散逸して蒐集意の如くならず、讀者にして教示し賜はるあらば此上なき幸とす。

前號（第十九卷第一號）目次

（大正十四年一月號）

歐洲戰爭に基づく國際金融上の關係　堀江　歸一
不換紙幣と物價　高城仙次郎
ラツサアルとマルクス（補遺）　小泉　信三
スミス以前に於ける貨幣價値論の二潮流　萩原吉太郎
婆羅門教法制に現れし徵利思想　芳賀　忠次

一冊定價金五拾錢
半ケ年分金貳圓九拾錢
一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
營業に關する用件は發賣元宛
原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十四年一月廿一日印刷納本
大正十四年二月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
第十九卷第二號
禁轉載

編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六

尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會